

書陵部紀要

第 1 號

目 次

發 刊 の 辭		(表紙裏)
皇后・中宮問題の解決	 芝 葛 盛	(1)
昭和廿三・廿四年度 正倉院樂器調査概報	 芝 祐 泰 長 屋 謙 三	(10)
圖書寮本類聚名義抄出典索引	 橋 本 不 美 男	(27)
書 陵 部 官 制 の 變 遷		(51)
藏書史と新收書解説		(55)
貴重圖書の翻刻と出版		(60)
疎開から展示會へ		(62)
編修課事業概要		(69)
正 倉 院 年 報		(73)
寫 眞 (正倉院御物・新收圖書)		

昭 和 2 6 年 3 月

宮 内 廳 書 陵 部

發刊の辭

宮内廳書陵部は、固の宮内省圖書寮、諸陵寮を合し、新に正倉院を加へた部局であつて、其の所管は、皇統譜、陵墓、圖書、記録及び正倉院に關するものである。即ち、皇室及び宮廷の文化的傳統を具象する記録や圖書、財物等を整理保管して、これを將來に傳へることを主たる職責とするものである。

これらの貴重なる國有財産は、その完全なる保存を第一義とするものであるが、同時にそれが或は正倉院の如き、或は圖書寮本の如きユニークの文化財たり、學問的資料たるに鑑み、その完全なる保存と背反しない限度で、時の良識に基づき學界及び一般にこれが利用の方途を圖することは、明治以降しばしば行はれて來たところであり、特に戦後ここ數年來、文化復興の氣運に應じ、新たに公開利用の方法が種々講じられつつあるのである。即ち正倉院御物、圖書寮本の展觀、調査、又は其の目錄の作製、刊行、圖書寮典籍解題の編纂、桂宮本叢書の刊

行、稀觀本の複製等が其の例である。書陵部の職員はそれらの仕事に従ひつつそれぞれの分擔に應じ、或は皇室、宮廷に關する歴史學的・文學的調査研究に従事し、或は圖書寮本を資料とする學問的研究の一端にも觸れ、或は正倉院御物に關する諸調査に關して外部の専門諸家と協力し、或は又陵墓に關する調査等に若干の努力を試みつつあるのである。斯かる調査研究は大概事務的必要に基づくものであり、性質上公表すべきものでない場合も多いのであるが、之等の業績中には、公表して學界及び關係諸方面の參考に供し、批判を仰ぐに適するものがあるかと思はれるのである。もとより諸大學や、純粹の學術研究機關とは趣を異にし、學術論文又は研究報告をのみ採録するものではないが、資料的價值ある調査や報告を編集して、ここに年次の「書陵部紀要」の刊行を企てた所以である。

昭和二十六年三月

宮内廳書陵部